びわこの考湖学

27

膳所築城

「天下制する」瀬田橋の防衛

膳所城は、日本三大湖城のひとつに数えられています。どのようにして築かれたのか、みてみましょう。

大津城は、大津港および大津百艘船の管理を大きな役割として担い、京と近江（東国）の喉元をおさえるために築城されました。しかし、関ヶ原前哨戦である大津籠城戦において至近距離の長等山から砲撃を受けたという軍事上の観点から、再興するのではなく場所を移すことを、徳川家康の側近である本多正信が進言したといいます。

そこで候補に挙がったのが、大津よりも南に位置する勢田城や窪江城（いずれも山岡氏の城）、もしくは膳所の大明神社などであったといいます。

これらの候補地から、徳川政権が新たな城に求めたものが何であったのかがうかがわれます。候補地は、琵琶湖から唯一流れ出す瀬田川に架けられた瀬田橋（勢田橋）を取り囲むように位置しているのです。つまり、おさえるべき京と近江の喉元が、ここにあると考えたのでしょう。

瀬田橋が幾多の戦乱の舞台となっていることからもうかがわれるように、ここは、大津宮―畿内（平城京）―平安京―京都などといった当時の中心地と、いわゆる東国とが対峙する際の最後の防衛線のひとつとなっていました。

「瀬田橋を制するものは天下を制する」というイメージを具現化した築城であったのです。当然のことながら、瀬田橋の維持管理は膳所藩が受け持つことになっていました。

膳所での築城に当たっては、8人もの奉行を付け、縄張りには築城の名手とうたわれた藤堂高虎にあたらせるという念の入れようで、多くの武将に割り普請（天下普請）されました。関ヶ原合戦後における徳川政権初の築城という側面があったことも見逃すことはできません。

城主は戸田一西、同氏鉄、本多康俊、同俊次、菅沼定芳、石川忠総を経て再び本多俊次となり、以降13代にわたって本多家が城主をつとめました。彼ら歴代城主にはいくつかの共通点があります。家康の故国三河の出身であること、譜代の家臣であること、家康が関東に拠点を移すとともに関東に所領を与えられていること、関ヶ原の戦いの後には中部・近畿の大名となっている点が挙げられます。いまなお旧膳所藩領では、治世が長かった本多家の家紋（立ち葵）のはいった瓦を用いた建物を見ることができます。

初代城主戸田一西のころの膳所藩領は明らかではありませんが、三代本田康俊のころには約3万石のうち約2万5000石が栗太郡および滋賀郡の瀬田川周辺にあり、大半が全村膳所藩領であったことが分かります。つまり、瀬田川沿岸の村々がことごとく組み入れられていたのです。領地と城郭が緊密に結び付けられ、かつ、瀬田橋をめぐる軍事的な意味を持たされていたことがわかります。

残された絵図などをみると、本丸は二の丸のさらに琵琶湖に突き出たところに築かれ、二の丸とは廊下橋だけで繋がっており、まるで琵琶湖岸に浮かぶ島のようです。琵琶湖に張り出した四重四階の天守は、瀬田橋防衛の拠点という軍事的な側面を持ちつつも、さぞかし優美な姿を水面に映していたことでしょう。

（滋賀県文化財保護協会　畑中英二）